

保育者を目指す学生の保育観

—実習簿の記述から読みとれるもの—

小倉 定枝

(洗足学園短期大学)

<はじめに>

現行の「幼稚園教育要領」においては、子どもを主体として個々の子どもに添う保育の理念が貫かれており、現場の保育者もこの理念に多大な影響を受けていることが報告されている（諏訪ら：2000）。筆者の前勤務校の学生も、保育について学ぶと「子ども一人ひとりを理解したい」などの理想を抱いていた。しかし、実際に子どもと関わる場面において、その理念に基づいた保育実践が行われているとは限らない。本研究では、学生の実習簿における自由記述欄から学生が子どもをどう理解し、どのような価値基準で自らの保育を振り返っているのかを検証することを目的とする。

<方法・結果>

福祉系専門学校の保育者養成コース(3年制)の3年次生38名が1999年9月中旬～10月初旬に行った幼稚園実習の実習簿の「感想」欄に書かれた、内容を初日、1週間後、10日後、2週間後、責任(部分)実習後ごとに以下の視点で分析を行った。

1. 学生の視点の中心—全体か個か—

<分類の項目と分ける際の視点>

① 子ども理解に関するもの

学生が日々の保育において子どもを理解する際、一人ひとりに注目してその世界を理解しようとしているのか(個の理解)、クラスの子どもの全体をひとまとまりに理解しているのかを探るため、子ども全体の印象を捉えたもの(a)、一人の子どもに注目してその世界を捉えたもの(b)の2つの視点で内容を大まかに分けた。

②保育を振り返るもの

保育を振り返る時の視点を、クラス全体をまとめた、保育者としての自分の意向に子どもを誘導することを重視した視点(a)、クラスの子どもの視点を考慮して、環境の構成や言葉かけなどを全般的に振り返るもの(b)、特定の子どもの関わりにおいて自らが与えた影響や、そのとき感じたこと、その子どもの自己充実を助け得たかの視点(c)に分けた。

表1 学生の子ども理解、保育を振り返る際の視点の分類結果

実習日	項目	①a	①b	②a	②b	②c
	初日(—2)	20	2	11	5	4
	1週間目(—3)	21	1	17	11	5
	10日目(—4)	42	0	21	18	2
	2週間目(最終日)	22	3	14	8	1
	責任実習(—6)	6	0	39	20	0
	計	111	6	102	62	12

* (—) は、38名のうちその人数分の資料が不足していることを表す

各項目ごとに、記録学生数を示していく。同じ学生が二通りに数えられることもある。分類に際して迷う際は、第三者にも分類の正否を尋ねて、客観的な分類を心がけた。

上記の視点で分類すると、表1に示された結果となった。「①子ども理解に関して」は、「a. 子ども全体の印象を捉えたもの」が実習全体を通して111件あった。これに対して、「b. 一人の子どもに注目してその子どもの世界を捉えたもの」は実習全体を通して、6件であった。この結果から、学生が子どもを捉える際、一人の子どもの様子からその子どもの世界を理解するという視点よりもむしろ、クラス全体の子どものついて漠然とした捉え方をする傾向があることがわかる。また、「保育を振り返るもの」の記述内容では、実習全体を通して「a. クラス全体をまとめることの成否、保育者の意向を重視したもの」が102件あった。また、子どもの視点を考慮しているが、クラス全体と自分との関わりを振り返る(b)は62件であり、「c. 子どもとの個人的関わりについて」保育を振り返るものは、12件であった。この結果から、学生は自らの保育を振り返る際、ある程度子どもの視点は考慮しているものの、一人ひとりの子どもへの対応に対しての保育の是非をほとんど考察しておらず、クラスの子どもの全体と自分との関わりに注目する傾向があることがわかる。

2. 学生の記述内容から—学生の価値基準—

ここでは、1. の分類において、記述の多かった「①子ども理解」の「a. 子ども全体の印象を捉えるもの」と「②保育を振り返るもの」の「a. クラスをまとめることの成否、保育者の意向を重視したもの」について内容を具体的に切りあげ、学生が保育を行う際、何に価値を置いているかを探っていく。

①子ども理解に関して 「a. 子ども全体の印象を捉えたもの」の内容は以下に2つの大きく分けられた。

A) 元気、楽しそう、嬉しそう、頑張っているなど子どもの気持ちを推測したもの

・運動会の練習で子ども達も
残暑の中一生懸命頑張っていた。

・男の子は元気がいい、個性的。
子どもは元気だった。

・おいもほりで子ども達はたくさんとったことに喜びを感じているようだった。子ども達は感動しているようであった。

・歌詞もだいたい覚えてとても楽しく歌っていました。

イ)「～ができる」など子どもの能力を観察したもの

・小さいのに組体操ができるんだと思い、すごいと感じた。

・子ども達が図鑑を見て秋の実などを描いているのを見て、なかなか上手にかけるのだと思った。

・年長さんになるとすごいきちんと歌っているなあと思いました。

ア)に見られるように、「楽しそう」「頑張っている」「元気」などの表現が多く用いられている。これらは、一見、子どもの心情や意欲、態度を推し量るものであるが、自分が現に向き合っている子どもの心情の微妙な変化や機微を推測するものではない。つまり、個々の子どもを理解しようとするのではなく、集合としての子ども一般を表面的に捉えているといえる。また、イ)に見られるように、子どもが「～ができる」「上手い」「早い」「きちんと」という記述が多く見られた。これらは客観的に観察可能な結果のみを捉えた子どもの評価であり、表面的な子ども理解であるといえよう。

②保育を振り返るもの 最も記述の多かった「a. クラス全体をまとめることの成否、保育者の意向を重視したもの」の内容は以下のように分類できた。

<子どもをまとめることを重視したもの>

ア) スムーズな保育の展開を重視したもの

・予想以上に時間をかけてしまったり、計画通り幼児が行動してくれないことがあって、予定と内容がやや違ってしまったところがあった。

・ペープサート人形に興味を示してしまい、絵本へスムーズに移れなかった。

・しっかりと流れを早く把握して、スムーズな声換え、呼びかけができるように心がけていきたい。

・(製作の際)少しアドバイスをするだけで、すぐそのように行動し、作業はスムーズに進んだ。

イ) クラスのまとまりを優先するもの

・部分実習よりもゆとりをもてた。しかし、次の動作にわたる前の子どものまとめ方はまだまだ上手にいかなかった。

・作り終わった子どもに、どのようにして待っていればよいか伝えなかったのが、自由に動き回ってしまい、騒がしくなってしまったので、最後まで留意点として考えなければならぬと思いました。

・部分実習で、ごちそうさまの挨拶がバラバラになっ

てしまった。やり直しをして全員がきちんと挨拶することができた。

<保育者の意向に沿わせることを重視したもの>

ウ) 子どもの興味をひくことを重視したもの

・もう少し子ども達がやりたがるような声かけや導き方をしていけたらと思う。

・(担任の保育者が) 子どもの興味をうまくこちらに向けていた。私も先生のように子どもをこちらに集中させる技術を身につけたい。

・本を読む前に気をひくために手遊びを1回したけれど、静かにならないまま本を読んてしまった(略)

エ) 子どもの気持ち・行動を保育者の意向に沿わせる

・子ども達は実習生の言うことはあまり聞かない。先生が言えばすぐに動くが私ではなかなか上手にいかない。しかし、これは子どものせいではなく、私自身ももっと子どもの気持ちを上手に導くようにしなければならぬ。

・反省すべき点は、片づけやししゃべってはいけない時、子どもが話しかけてくるので一緒にしゃべってしまった。片づけやししゃべらないように促していく必要があると思った。

ア) イ) から、多くの学生は「スムーズ」に保育を展開できたかどうか、クラスをうまく「まとめ」られたかという視点で自らの保育を反省している。子どもの興味や気持ち、実態よりも「スムーズ」にうまく「まとめる」ことを重視しているのがわかる。ウ)からは、子どもの興味よりも保育者としての自分に興味を引きつける技術の善し悪しを判断の基準にし、子どもの興味を自分にむけることに価値を置いていることがわかる。エ)からは、自らの価値基準に子どもの気持ち、行動に沿わせようとしている学生が多いことがわかる。

<考察>

結果から、多くの学生は保育を実践する際、子ども集団全体を捉え、その形をいかに整えていくかということの主眼にしているといえる。学生のこうした「全体」への志向が、子ども理解を表面的なものに留め、子どもの個々の気持ちに添い内面を理解する視点を失わせることにつながっているのではないだろうか。こうした保育においては、個人が見いだされるのは、あくまでも集団の形から外れたり、子どもがルールを守らない時等ということにもなりかねない。

では、なぜ学生はこのような「全体」への志向を抱いているのだろうか。これらへの探求は、今後の課題としたい。